
幽靈相手に日々奮闘中!?

荻原あきこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊相手に日々奮闘中！？

【Zコード】

Z2701F

【作者名】

荻原あきこ

【あらすじ】

なんで…俺がこんなことしなくちゃいけないんだあ…！？いきなり幽霊退治？俺の平凡な人生を返しやがれ…！！

プロローグ

「ふざけんなあ～！？俺は…視えたって何も面白くねえんだよ～～！？」

俺の叫び声が事務所に響き渡った。

影柳さんと靖史さんは二コ二コ笑いながらも、つるさんをさうに耳を塞いだ。

俺は…俺はだなあ！？

平凡な人生を送りたいんだあ～～～～～！

- - - - -

両親の影響で小さい頃から幽霊が見えていた俺、
蘿木 カブ
ラギ 蒼太 ソウタ

俺は高校生にもなり、幽霊なんかと関わらないように平凡な人生を送るつもりだったのに…。

いきなり

「G B」とか書かれてる看板の事務所に連れてこられて……！？

【1】俺は幽靈なんか信じない！

「なあ、幽靈って信じるか？」

俺はダチである木更津直樹のそんなバカらしい質問に即答した。

「信じねえよ、バカ」

「なつ…！？バカとは何だ、バカとは…！？」

「うるさい、耳元で叫ぶな」

あまりのうるさい俺は耳を手で塞いだ。

「バカなもんはバカなんだ。潔く認めろ、私はバカですってな」

「なんだとお！？いいか？バカって言う方がバカなんだ！覚えとけ
！」

「うわあ……。

言つけひやつたよ…。決まり文句言つけひやつた…。

「小学生じゃあるまいし。まだそんなこと言つてんのか、バカ?」

俺がそう言つと、直樹は猿みたいに

「むきく！？」と叫んで、一人で勝手になんか喋つていた。

もちろん俺はガン無視。

まったく…迷惑つたらありやしない。

因みに「」は、放課後の学校の図書室。

もちろん他の生徒や担当者の先生がいるわけでもない。

「 ハハ、セー？」

そんな怒声に直樹の動きが止まる。

直樹は恐る恐る後ろに振り返つて、責めた。

「 ゲツ……ババア」

直樹がボソッと呟いた。

「 ババア……まあ、そのままだけど……。」

江田洋子（50歳）
図書室担当の先生だ。

はつかり言ひと、口ひるむべく、あまり生徒には好かれていない。

「こゝは図書室ですよ！？」周りの迷惑になります。静かにしなさい
……。」

ババアの怒声に、勉強をしていた何人かの生徒が迷惑そうに顔をしかめた。

お前がつるさいよ、ババア……。

と言つてみたい。
が言わない。

言えば、更にあのうるさい怒声がパワーでかかるから……。

「あ……」

俺はあることに気が付いた。

幽霊なんて信じないなんて言つてはみるもの……。

。まひざ
……。

「気が付かないよ」としてたの……

俺はそう呟いて、溜め息つき、ババアの後ろを見た。

女が立っている。

髪の毛がやたらと長い。

だらしなく垂れた髪の間から覗く、妙に光を放つ氣味の悪い瞳。

じつと、ババアを見つめている。

ババア…なんかしたのか？

なぐんてな…。

女なんていないない！

いるわけねえじやん。

幽靈なんてや。.

俺は幽靈なんか信じない！？

【2】綺麗なお姉さんといケメン（死語）なお兄さん現る！？

「あ～あつか……」

俺はボソッと呟いて、学校を出た。

今日も途方もなく平凡な一日だった。

でも俺は平凡が嫌いじゃない。

しかし……。

ウザイな……。

「…寄つてくんな

俺はそう言つて、空を睨み付けた。

「君、幽霊見えるの？」

「は……？」

そんな声に振り返れば、そこには綺麗なお姉さんとイケメン（死語…）のお兄さんがいた。

「えと……今なんて？」

「だから、君、幽霊見えるのって？」

お姉さんは俺に顔を近づけて、ちよつともむっとしたような表情でそう言つた。

幽靈…？

幽靈って言つたかこのお姉さん？

幽靈…？

「ハハハッ…幽靈なんているわけないじゃないですか」

俺は苦笑いしながらもやう答えた。

「ホント…？」

お姉さんは更に顔を近づけてくる。

「ほつ…ほんとですか…！？」

あまりの顔の近さで、俺は少しうさぎになってしまった。

「ふ～と……じゃあ、やじろの幽霊はどうな姿でしたね。」

「えと……中井ナリコーマンですか…………ひ……ついてこせ今の
は激しく違いますよー。」

何答えるやつてんだよ、俺～！？

「やつ……見えている感じないって嘘はいかなことわよ～少井

お姉さんはいつもして、怪しく笑つと俺から離れた。

「いや……あのですね……今はきっと間違つて……」

俺はじどめがひになんとか言つて呟つとした。

「間違いなんかじやねえだ？お前が言つたことは当たつてゐる。や」

には間違ひ無く中年サラリーマンがこる「

お兄さんが初めて口を開き喋った。

お兄さんは空を見つめて、目を細める。

ハスキーな声だ。

この人モテるだらうなんて……考てる暇ないだろ、俺！？

「いや……あ～もつ…何なんですか、あなた達！？」

俺は何故かキレてしまつた。

幽靈なんかと…幽靈なんかと関わらないよつて生きていたかつたのに……。

この人達の所為で台無しだ！

「…俺は幽霊なんかと関わらないようにしてきましたのに…？」

「ふうん、 そうなの？」

お姉さんは興味なさそうに、長い黒髪をかきあげる。

「そつ… そうですよ！ 大体誰が幽霊なんて信じるんですか…？ 幽霊なんか見えるなんて言つて誰が信じてくれるんすか？ それこそ変人扱いですよ…？」

俺がそつと言つと…。

「いつから幽霊は視えてるの？」

完璧無視なお姉さん……。

「…つて！ 人の話聞けよ…？」

「で、 いつからなんだ？」

お兄ちゃんは「いやいやしながら聞こえてくる。

あなたも無視しますか…。

たくつ……。

「小さい頃からですよ…。大体3歳ぐらいからかな?流石にそれが幽霊とまでは認識できませんでしたけど……たぶん幽霊が見えるのは両親の影響ですよ…。」

俺は仕方なく答えた。

「へえ、両親…。」両親も幽霊が見えられていたの?」

お姉さんが「いかがでしたか」感心したよう聞こえてきた。

「みたいですね。今はもうあの世で仲良くなっていると思いますよ」

俺はもう投げやつにいた。

「アハ…。君、名前は？」

お姉さんは一瞬、微笑む。

「蒼太… 蕪木蒼太です」

「蕪木…？ホントに…？」

お姉さんが“蕪木”とこういって、妙にくつこってきた。

「まつ…まこ」

「わい…。無木…ね。靖史…これ、ビンゴなんじやない?」

お姉さんは怪しく笑い、お兄さんを見た。

「かもなあ。でもまだはつきりと決まったわけじゃないし……。とりあえずは事務所に連れてていきますか?」

お兄さんはそいつひつて、俺の肩に手を置いた。

ああ……母さん、父さん……俺は変なお姉さんとお兄さんに捕まってしまいました。

「ではでは、よつこそ蒼太君。我が“GB”へ

つて……あれー？

こいつの間に学校から「こんなとこでー！」？

狭い路地を抜け、たどり着いたのは、古ぼけた建物だった。

なんかだつさい… GB…？と書かれた看板をぶら下げて…。

何なんだよ… じじっ.

「ほら、ほら、入つて入つて！」

階段を上り、なんか勝手に招き入れられている…。

「……つて……勝手に連れてくんなよー…？」

俺は思わず叫んでしまい口を手で塞いだ。

ここが俺の今までの人生にピリウドを打ち、新たな人生のハジマリとなつた場所。

つか……勝手に連れてくんなんあ～～～！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2701f/>

幽霊相手に日々奮闘中!?

2011年1月15日02時57分発行